

贈答から見た日本人の心

——日本人の贈答慣行への一考察

孫 欣欣（大学院委託研究生）

1. はじめに

人間社会において、日常生活を営むために、誰も周りの人々との交流を避けることができない。贈答というのは、社会における最も重要なコミュニケーションの方式だと考えられる。贈り物を通じて、ある種の協力、競争、或いは敵対的な社会関係が結ばれている。フランスの人類学学者マルセル・モースの『贈与論』¹が指摘したように、贈答と呼ばれる互酬的な慣行は、経済や法律、呪術、宗教、道徳、情緒等の様々な要素を包み込んだ「社会事実」である。贈答という行為を研究するのは、異なる社会文化と社会規則を理解するために一つのルートを提供できると言えよう。

贈り物をするのは、個人、集団間の付き合いにとって重要な意味を持っているだけでなく、国家関係にも重要な意義があると考えられる。有名な「中日友誼の蓮」はその一例である。1956年、日中友好の証として、日本の大賀博士と阪本祐二氏が中国科学院長の郭沫若氏に大賀蓮の実100粒を贈った。郭氏は、中国各地で栽培させ、2年後に開花した。そして武漢植物園で、大賀蓮と中国古代蓮の交配に成功し、生まれたのがこの「中日友誼の蓮」と呼ばれている。その後、武漢植物園は交配に成功した10粒の新しい実を返礼として阪本祐二氏に贈り返した。「蓮の花」を通じて中国と日本との間には深い友情の絆が結ばれており、蓮の花も中日友好の象徴となっている。

その故、中日両国の贈答慣行を研究するのは、両国の社会文化を知り、両国間の相互理解を強化するのにたいへん役立つと言える。特に、中日間の政治のギク

シャクした関係が続いている現在では、このタイトルで研究するのは、特別な意義を持っていると思う。

贈答の世界には様々な行為が含まれている。本稿では、中日両国でもよく見られる贈与と返礼という行為を取り上げ、中日贈答慣行における共通点及び相違点を考察し、また、その背景にある両国の社会文化、国民心理を分析したいと思う。

2. 先行研究

2.1. 贈答についての先行研究

マルセル・モースの『贈与論』は、相互関係と贈り物の交換を研究する最も有名な著作である。人類学の贈答に関する理論は主にマルセル・モースの『贈与論』から生まれたものである。『贈与論』が発表されて以来、贈答研究は、主要な研究分野の一つとなっている。モースは原始社会における贈与の慣行を考察し、贈り物によって作られた繋がりは所謂人間社会における相互依存の関係であると述べ、贈与が経済的な領域をこえた重要な機能、すなわち贈与する人の地位を高めることや贈与されたものをもつ人々の生活を楽しくする機能をしていると彼は述べている。マルセル・モースによると、昔の人は、贈られた物が霊を持ち、呪術的、宗教的、霊的な力の媒介物であると信じていた。返礼をする義務が遵守されない時、贈り物にはその者を殺害する力があると信じていたから、贈り物に対する返礼は絶対的に必要だと確信していたという。

こうしたモースの試みの他に、マリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』²はメラネシアのトロブリアン諸島の部族間で広範に行われていた交換の一形式である「クラ」を取り上げ、贈答品の種類、移動、規則、慣習など厳しく規制された行儀を考察し、その後の贈与交換論を方向づけていた。

モースの『贈与論』とマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』は、贈与交

換論の基礎を築いた著作である。

2.2. 日本の贈答文化についての先行研究

日本における贈答の習俗を最初に研究し、その意義を明らかにしたのが柳田国男氏である。柳田氏は、「つきあい」の一つの表現である贈答の習俗を比較した上で、贈答が食物を基本としていることに注目し、それが神への供え物であり、また、神と人々とが共食（共同飲食）することに贈答本来の意義があると考えた³。この考えを受けて、民俗学者による贈答に関する資料の収集や、特定の機会についての贈答品などの検討が行われてきた。例えば有賀喜左衛門氏⁴は、近世からの家の忘備録に記載されている結婚式と葬式の贈答品を分析して、それが米や野菜などの自家生産品から金銭へと変遷したことを明らかにし、日本の社会における贈与交換の本格的な研究を始めた。

しかしながら、日本の社会における贈答の研究は、これまで、十分に行われてきたとは言えない。柳田国男氏を理論的な指導者とした日本民俗学では、贈答に関する研究が研究分野の一つとされ、これまでにかんがりの実績が公表されていたが、そのほとんどが記述的な研究に終始している。

こうした民俗学者の試みの他に、文化人類学者も日本の贈答習慣に関する研究を行っている。例えば、別府春海氏⁵は文化人類学者の視角から出発し、日本文化とかわりの深い一連の対概念を考慮して、「贈答」という行為には「ハレ・ケガレ（聖）／ケ（俗）」、「公／私」、「義理／人情」、「建前／本音」という四つの対概念が含まれると述べ、贈答の文化的概念を整理し、日本における贈答を研究する代表的な学者の一人となった。日本の国立民族学博物館で3カ年にわたって行われた特別研究の成果として刊行された『日本人の贈答』は、日本における贈与交換をめぐる諸理論を収録して、かなり影響力がある著作である。

さて、本稿では、これまでの記述的な研究に留まらず、先行研究の成果、特に『日

本人の贈答』という本の理論を参照しながら、日本社会の贈答という慣行から特に興味をひくところを取り上げ、日本における贈答の伝統と現状の再検討を試みてみたい。

3. 研究方法

本論文では、先行研究に基づき、アンケート調査の方法と文献資料を分析する方法と対照研究を試みたい。

3.1. アンケート調査の概要

さて、今回実施された中国と日本の贈答習慣に関するアンケート調査の方法、対象、回収結果などについて説明しておく。

- ① 実施期間：2006年5月～9月。
- ② 調査実施委託機関：中国華北科技学院、ACCA 航空計算センター及び日本NPO「アジアの新しい風」、愛知大学。
- ③ 調査方法：アンケート調査表を直接配布、回収する。
- ④ 調査対象：主に中国と日本の大学生や社会人を調査対象とした。調査対象の構成について、以下（表1）の通りである。

（表1）調査対象の構成

年齢 / 国籍	中国人(80人)	日本人(80人)
20歳前後	52	40
30代	11	3
40代	1	8
50代	16	15
60代	0	14

4. アンケート調査についての分析（贈答から見た日本人の心）

これから、筆者が実施したアンケート調査から得たデータを参考しながら、日本人の贈答慣行、贈答心理及び贈答に関する中日の比較を考察してみたい。

4.1. 義務付けられている返済（日本人の義理）

4.1.1. 日本人の返済についての意識調査

先にも述べたように、贈答における互酬性理論に基づき、贈答の世界においては贈与に対する返済は、既に慣行として義務付けられている行為だと考えられる。しかしながら、アメリカの学者ジェームス・ガンディアは、欧米の社会で流行っている贈答の理念について、次のように述べている。贈与交換は義務性及び強制性を持つ行為ではなく、それは送る側ともらう側に制約されずに、もっぱら当事者の心の純粋な表現の他ならない⁶。ジェームスが述べた欧米の贈与では、特に返済の義務性がそれほど強調されていないことは注目には値すると思うが、更に興味を引くのは、現在の日本では、返済の義務性と贈答の互酬性がどうなっているかということである。そういう疑問を持って、筆者は返済という行為について日本人を対象として次のような調査を行った。

(図1) 問1：贈り物をもらった後、相手に返礼するか

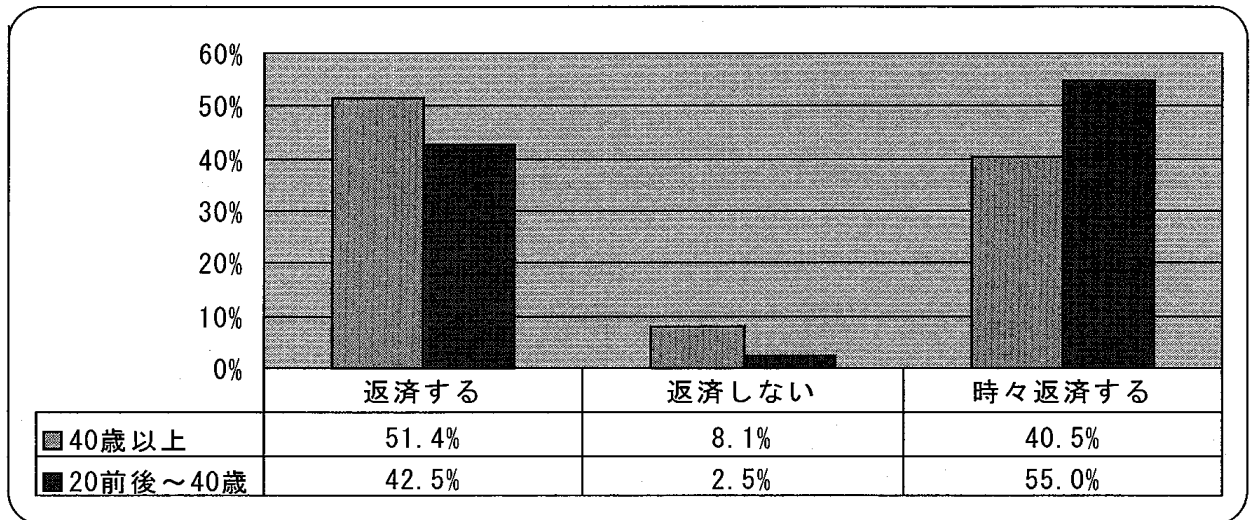


図1で分かるように、「返礼しない」と答えた人の割合はそれぞれ1割未満である。「40歳以上」の調査対象では僅か8.1%で、「20前後～40歳」の対象では2.5%しかなかったのである。「返済する」及び「時々返済する」と答えた人が合計するとそれぞれ91.9%と97.5%の高い比率から見ると、贈り物に対する返済することは、日本人の生活では非常に普通なことだと見られる。また、若い人より高齢の方がその傾向が強いと分かる。

4.1.2. 日本人の義理と返済

日本の社会において、返済の慣習が定着している原因を考察するために、同じ調査対象に「どんな目的で返済するか」との質問を出した。その結果、「もらったプレゼントに対して感謝の意を表したい」、「礼儀の基本だと思うから」、「今後も相手と良い関係を維持していきたい」などの一般的な回答以外に、「義理を欠くようなことをしたくないから」との回答がかなり際立っていた。贈答に義理を伴うのは、興味深いことであるから、以下にこのことに焦点を合わせて検討してみたい。

日本における返済と義理との関係を見つけるために、まず日本人の独特な「義理」の世界を考察しなければならない。封建社会の中で形成された義理の概念は、主従、親子、夫婦、兄弟、朋友、時には取引先という人間関係の中で最も重視される規範であり、しいていえばこれらの関係の中で恩を受けた相手を思いやりいたわり、時には自己を犠牲にしてまで相手の幸せを実現する決意のことである。有賀喜左衛門は義理について「日本の社会関係を規制する一定の生活規範の意味」であり、「集団をもつ生活規範に対する個人の立場や意志・感情は、人情としてこれに対立したり順応したりするものである」と述べている。

日本では義理と贈り物を直接に繋いだ典型的な例は「義理チョコ」というものである。「義理チョコ」とは、2月14日のバレンタインデーに日本の女性が男性の友人、同僚などに社交的な義理で贈るチョコレートのことである。「バレンタインデーに恋人以外の男性にチョコレートを贈るか」との質問を出したところ、以下の結果が出た。

(図2) 問2：バレンタインデーに恋人以外の男性にチョコレートを贈るか

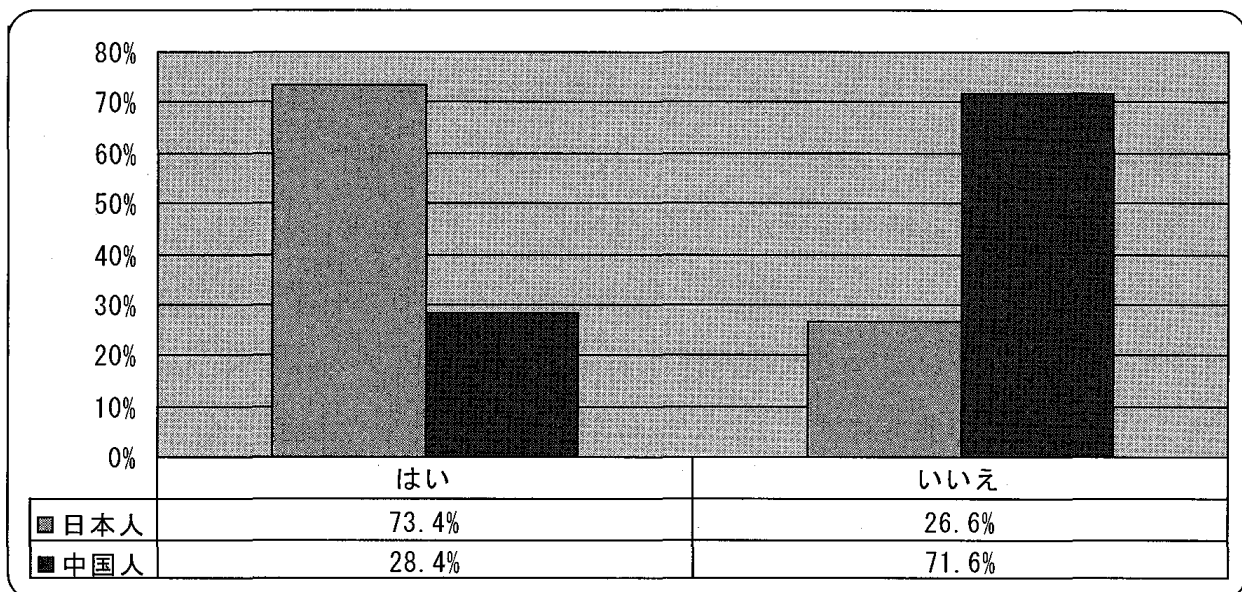


図2で分かるように、73.4%という高いパーセンテージなので2/3以上の日本

人の調査対象は恋人以外の男性にも平気でチョコレートを贈るが、それに対して、中国では贈ると答えた人は28.4%しかなかったのである。普通、バレンタインデーの日に男性に贈るチョコレートに恋を乞うとの意味があるが、「義理から皆も贈るから、自分も従わなければならない」との考えを持って、恋人以外の男性に義理チョコを贈るのは日本人しか理解できないことだろう。義理チョコは殆どの場合にただある種の冗談としか言えないが、しかしある意味では、それは贈り物に伴う日本人の義理の何よりの表現だとも言えると思う。

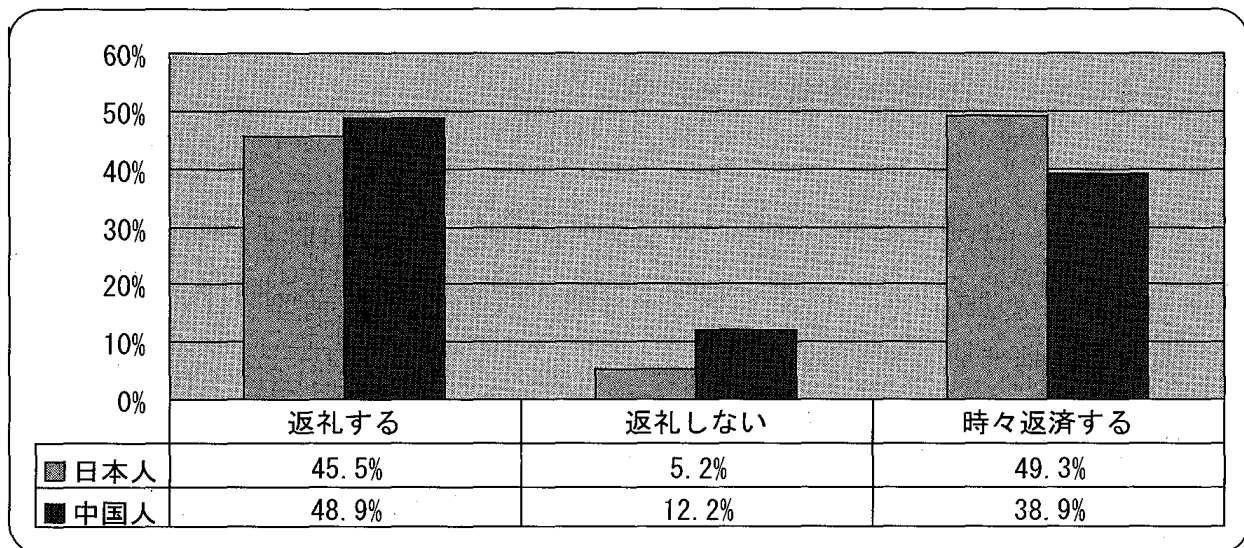
日本語には「義理を返す」という用語がある。義理を受けることはまるで債務を受けるように、返さなければ社会的にどうしても認められないことだと考えられる。そういう概念を贈答の分野に移したら、日本人の贈りものに対する返済の義務が規定されるのも理解できるだろう。義理に基づく贈答は、所謂中元や歳暮のように、制度上の規範によって、嫌でもしなければならぬものになってしまう。

実は、義理と日本人の贈答心理との関係について、いろいろな学者の研究で既に指摘されている。世界の諸民族の中で、義理はもっともめずらしいものの一つであると述べて、日本人の独特な義理の世界を指摘したのが人類学者のルース・ベネディクトである。日本の社会では、当事者の中に義理と呼ばれる互酬性の規範が強く作動する結果、贈与という一方的行為が、贈る側には返済の期待が、また、贈られる側には返済の義務が、社会通念として人々の間に定着している。「贈答」という概念は、このような贈与と返済をめぐる日本人の感覚を如実に反映したものである⁷。日本では、人間関係における義理のバランスを保つことが重視されている。それを返すために、数年にわたって義理を果たし続けることもある。義理を返した上で、今後も付き合いを続けるか、それとも付き合いを止めるかは自由のことだと考えられる。

4.1.3. 中国における贈答

それでは、中国の贈答についての慣習はどうかと言うと「礼尚往来」（贈り物が行ったり来たりをよしとする）という言葉はよく取り上げられるのである。「礼尚往来」が示すように、お互いに贈り物をもって贈与と返済をするのは中国において、きわめて重視される礼儀の一つである。儒家の説を集めたものである『礼記』によると、「礼尚往来, 往而不来, 非礼也; 来而不往, 亦非礼也」（贈り物が行ったり来たりをよしとする。贈るだけと貰うだけは、全部礼儀があるとは言えない）（『礼記・曲礼上第一』）という。それは中国における贈与交換にある礼儀を表すものでありながら、先に述べた互酬性原理の表現でもある。「贈り物をもらった後、相手に返礼するか」との調査では、図3が示すように中国では日本と大体同じように返済という行為は既に慣習として定着している。

(図3)



義理に拘って返済の義務を負う日本人と違って、中国人は多くの場合に「人情」のために返済の義務を果たさなければならない。日本語にも「人情」という言葉がある。それは、義理と対比されるカテゴリーであり、義理が人から受けた恩義

に報いるという人間関係の規範であるのに対し、人情は他人に対する感情の自然な表現として、ふつうには親子や恋人同士や友人知人などの間に通いあう愛、同情、憐れみ、友情などの人間的な感情を指すのである。一方、中国語の「人情」は、更なる広い意味を持っている。梁漱溟は中国の社会を「人情」と「関係」の社会と述べている。中国社会では、人情には人間関係、面子、恩返しなどの内容が含まれ、社会的に認められる行為の規範であるので、人情を犯すことは中国では深刻な誤りだと考えられる⁸。中国人の贈答の世界において、人情も核心となる概念の一つである。人情の世界で生きるために、贈与、返済などの行為を通じて他人と良い関係を維持するのは不可欠な条件である。

以上の議論を整理すると、二つの点を指摘することができる。一つは、中国においても日本においても、贈り物に対する返済は既に慣行として定着していることである。もう一つは、その背景にある原因について、日本では、「義理」に対する考慮は返済を行う主な理由であるが、中国では、返済は「人情」の世界で生じた礼儀の一つであると言える。

4.2. 日本における返済の即時性と対称性

ここまでは、日本で定着されている贈答の慣行とその定着性を駆動する原理を論じてきた。これからは、日本における返済の特徴及びそれが生じた原因を中心に、議論を進めていきたい。

CRI 北京国際放送局日本版のホームページには「中日間の誤解を話しましょう」という掲示板がある。それは、人気フォーラムとしていつも大勢の人が集まっている。そこには「すぐに返されたお茶に戸惑った」をテーマとした次の発言が掲載されたことがある。

「6年前、日本に行った時、あるテレビ局の女の子からウーロン茶が好きだと言われて、手元にお土産で持っていたウーロン茶の茶葉があったので、あげた。

すると、翌日日本のお茶を返された。中国人の私は、それがこれ以上付き合いたくない意味としてとらえ、戸惑った。しかし、その後、ディズニーランドにも誘ってもらったので、自分が誤解していたことがわかった」。

発言した中国人の女性は、日本人の友人からの迅速且つ等価の返済に戸惑って、絶交のメッセージだと完全に誤解してしまった。そのことから我々は一つの啓発を得ることができる。所謂、日本における返済の即時性と等価傾向（対称性）は、中国とは全く異なることである。

中国では、同じ価値の贈り物をできるだけ避けたほうがいいと考えられる。中国人の場合、同じ価値の返礼、或いは全く同じ贈り物を貰うと、相手が自分とこれ以上付き合いたくない、または、絶交するように思われがちである。返礼は、弁済をすることではないと思っている中国人にとっては、貰ったものよりやや高いものを相手に贈り返すのが慣行である。「礼大庄死人」（高価の贈り物ほど怖いものはない）という中国語の諺の通り、あまりにも貴重な贈り物は、相手に大きな圧力を与えることになる。なぜかという、それ以上の返礼が必要なことから。というわけで、適当な価値の贈り物を贈るよう、注意を支払わなければならない。

返済の時期について、中国の場合、日本の即時性ではなく長い時間が過ぎていても、相手の贈り物を忘れず適当な時期に返済を行うのが普通だと考えられる。一方、時間が長ければ忘れることもあるので、相手の感情を傷つける可能性もある。なので、時間がたっても忘れないようにいつも留意すべきである。

贈答の互酬理論によると、贈られる側の返済は予期されているものであるが、日本で行われる即時的、等価的な返済は、中国人だけでなく他の外国人から見ても珍しくて独特なものだと言えよう。日本人の贈答を考察する際に、「即時的返済」と「対称的返済」はよく取り上げられる対概念である。それでは、日本における返済のその二つの特徴、及びその特徴が生じた原因について考察してみたい。

4.2.1. 日本における返済の即時性

Lebra⁹によると、即時的返済は、餞別に対する土産や病気見舞いに対する快気祝いの招宴のように、贈与に対して短い期間で行われる返礼のことで、贈り物をもらった側に、長い間債務者としてとどまらせないために贈られるものである。表2が示すように、行事によって返済の時期が多少異なっているが、できれば早く計算するのは一般的な傾向である。それは、贈りものに対するある種の「領収書」の意味があるし、日本の社会に深く根をおろした互酬性の規範とも不可分の関係にある。

(表2) 返済の時期 (一部)

行事	返済の時期
結婚	式後1か月以内
出産	出産1か月後
受賞入選	授賞式後2週間以内
七五三	当日
開店開業	披露当日に記念品

日本では、「オウツリ」と「オタメ」は即時的返済の代表だと考えられる。地方によって、その呼び方が違うかもしれないが、いずれも、贈物をもらった入れ物にお礼のしるしとして入れて返す簡単な返礼として、同様の意味を持つことである。それは、大都市より地方でよく見られるものである。

以前、オウツリとして手ぬぐいや半紙、マッチなどはよく取り上げられたものである。マッチの成分は硫黄、これが「いおう」→「祝う」に通じるところからマッチが使われるようになったようである。また、当時マッチは家庭の必需品でしたから、頂いた側にも喜ばれたものである。現在の日本でも、食べ物を貰うとその食器をそのまま返すのは失礼だと思われ、何かを添え返すのが依然として慣行である。

4.2.2. 日本における返済の対称性

日本における返済の対称性を考察するため筆者は返済品の価値について次の調査を行っていた。

(図4) 返済の価値についての調査

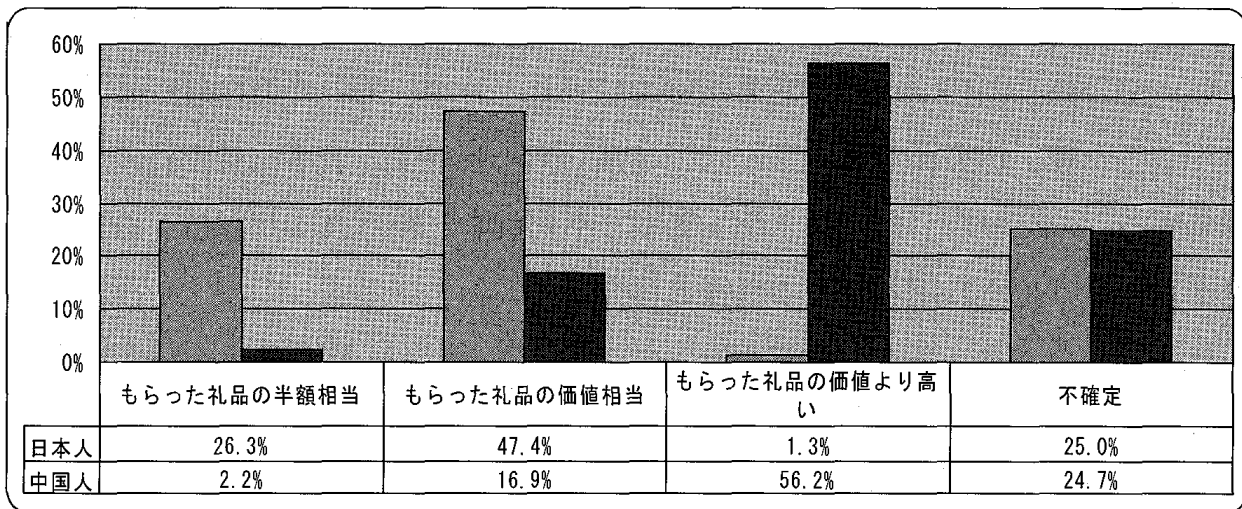


図4から見ると、日本人の場合では、返済の価値について等価の傾向があるのは47.4%で約半分に達している。それに対して中国人の方が、それを選択したのは16.9%しかなかったのである。そして56.2%の調査対象は「もらった礼品の価値より高い」ものを贈り返すことを選択した結果から、筆者が先に述べたことを改めて物語っていた。それに対して、日本人は等価的返済の傾向は中国人よりずっと強いことも分かる。

日本における返済の等価傾向について、多くの学者は既に指摘したことがある。贈答の世界において、そういう等価傾向は返済の対称性の一種だと考えられる。閻曇翔は『贈り物の移動』の中で日本人の対称的返済について、Lebraの観点を引用して次のように述べている。「対称的返済は、同じ機会に同じ贈り物を返すことである。息子の入学祝いにももらった贈り物は、相手の子供の入学祝いにお返

しをする。或いは、現金の贈りものには現金でお返しするのがこれにあたる」。

日本では、対称的返済というと、結婚する際のいろいろな儀礼はよく取り上げられることである。たとえば、結婚の際に婿方と嫁方の相互訪問の回数や招待者数の均衡化とか、結納や持参金のバランス、結婚費用や仲人に対する謝礼の折半負担などは対称的贈答の代表と言える。

今の日本の社会では、結婚式と葬式などの際に贈られる祝儀と不祝儀は品物から現金に変わってしまったが、その贈与と返礼のシステムはほとんど変化していない。受け取った側では、金額を正確に記載し、将来、贈った側に同じようなことがあった際、その記録を参考にしてほぼ同額の祝儀または不祝儀を贈るのが普通である¹⁰。だから、そのような祝儀帳と不祝儀帳と呼ばれる記録は、将来に等価交換を行うために用いられる覚書と言えよう。

日本の社会では、完全な均衡を取るのは難しかったが、贈り物として品物から現金に変わるとともに、贈答双方の均衡が取れるようになっていく。

4.2.3. 即時的、対称的返済から見た日本人の負い目意識

日本では贈与に対する返礼に等価が期待され、或は、等価が義務付けられ、交換当事者間で均衡が相対的に重視されているのは注意に値する事実である。日本人の社会関係には、均衡の原則というものが大きな作用を果たしている。近世以降、日本の社会で制度化された慣習の中には、均衡の原理によると思われるものがいろいろ認められる。均衡の理論に基づいて日本における即時的、対称的返済を理解してもいいが、それはただある種の表面現象だけなので、深層的原因とはいえないと思う。筆者の興味を引くのは、貰う側がなぜそんなに迅速且つ等価のお返しをするのか、つまりなぜそういう均衡の原理が日本社会で役割を果たしているかという点である。次に、その問題について探りたいと思う。

日本人の国民性研究で有名になったルース・ベネディクトの著作である『菊と

刀』において、日本人の返済と負い目意識との関係が指摘されている。ベネディクトによると「日本人は相手に貰った贈物よりも大きな贈物を返すことを禁制にしている。アメリカ人のいわゆる pure velvet を返すことは、決して名誉にはならない。贈物について言うことのできる最もひどい悪口の一つは、贈呈者が「雑魚の札を鯛でした」¹¹ という。その背景に隠れる原因は、つまり日本人の負い目意識だと考えられる。

また、ベネディクトは、日本人の負い目意識を説明するために、その事例として夏目漱石作『坊ちゃん』の一部分を取りあげた。

主人公の坊っちゃん、田舎の小さな町ではじめて学校の教師を勤める江戸っ子である。(中略)若い教師がいて、坊っちゃんはこの教師と親しくなる。ある時、二人で町を歩いていたおりに、坊ちゃんが「山嵐」というあだ名をつけたこの新しい友人が、坊ちゃんに氷水を一杯奢る。山嵐は氷水の代金1銭5厘—1セントの5分の1ぐらいに当たる—を支払う。その後まもなく、他の教師が坊ちゃんに、山嵐が坊ちゃんの悪口を言ったと告げ口をする。坊ちゃんはこの策動家の告げ口を真に受ける。するとたちまち山嵐から受けた恩が気になってきた。

日本人が全体として漱石とその作品『坊ちゃん』を高く評価している。ベネディクトによると、「その小説が高い徳の物語であるというのは、恩を受けた人はその報恩の念を『百万両』に値すると思ひ、それ相当の行動をすることによってのみ自分自身を負目ある者の立場から抜け出て向上させることができるからである」という。ここで特に注意しておきたいのは、その小説から見た日本人の思想——負い目意識である。

負い目は、屈辱にも通じる感情である。日本では、どんなに感謝される場合でも、贈り物は贈られた側に負い目を感じさせずにはおかない。受け取ったもの以上に大きな価値のあるものを贈り返し、負い目を分かち合うことを拒むだけでなく、一層大きな負い目を相手に与えようとする、つまり贈り物を対抗や優越の手段に変える敵対的な対応だと考えられる¹²。それは、マルセル・モースの『贈

与論』で取り上げられた「ポトラッチ」のように、相手に対して食べきれないほどのごちそうを供給することを通じて、寛大な人物という評価を受け、自分が相手より優位に立とうとしているのである。このような不均衡の結果から、日本人が負い目を感じてしまうから、そういう負い目を生じないように、できるだけ早く返済を清算した方がいいと考えられる。

以上の議論をまとめると、負い目意識は日本人の行動を駆動する一つの考えだと分かる。負い目を生じさせないように、均衡の原理は、日本人の生活にはかなり大きな役割を果たしている。そういう原理によれば、日本における即時的、対称的返済も理解できるだろう。しかし、現実には等価が必要だと考えられているのに、全くの等価にはならないのも事実である。だからこそ、日本人は負い目意識から出発し、贈答のやりとりを永遠に続けるようにしているのである。

5. 結び

中日両国とも贈り物が好きな国民だとよく言われる。結婚祝いや誕生祝いといった他の国にもある贈り物はもちろん、ちょっとした訪問にも手土産を持参し、敬意や好意を表すというのが、慣例になっている。コミュニケーションの掛橋と言われている贈答は日常生活において、かなり重要な役割を果たしている。ここでは、中日の社会における贈答慣行の中で、贈与と返済という行為を拾い出して、議論をできるだけ整理し、その再検討をしてみたが、次の諸点を取り上げたい。

①中国においても日本においても、贈り物に対する返済は既に慣行として定着していることである。しかし、その背景にある原因について、日本では、「義理」に対する考慮は返済を行う主な理由であるが、中国では、返済は「人情」の世界で生じた礼儀の一つであると言える

②負い目意識は日本人の行動を駆動する一つの考えである。負い目を生じさせないように、均衡の原理は、日本人の生活にはかなり大きな役割を果たしている。

それに対して、中国では、同じ価値の贈り物をできるだけ避けたほうが良いと考えられる。

贈与と返礼は、中日両国の社会や文化と深く関連している問題だと思うが、この他にも取り上げなくてはならない問題がいろいろあると思う。贈答活動に関する一切の説明ができたとは思わないが、ある程度までその手掛かりになれば幸いだと思う。

- 1 『贈与論』 マルセル・モース 上海人民出版社 2002
- 2 『世界の名著』 泉靖一編集 中央公論社 1967
- 3 『民間伝承論』 柳田国男 筑摩書房 1970
- 4 『日本家族制度と小作制度』 有賀喜左衛門 未来社 1967
- 5 「文化的概念としての「贈答」の考察」(『日本人の贈答』 ミネルブア書房 1984)
- 6 Carrier James 「Gift and Gift Economy」(『A Handbook of Economic Anthropology』) 1990
- 7 『贈与交換の人類学』 伊藤幹治 筑摩書房 1995
- 8 『贈り物の移動』 閻曇翔 上海人民出版社 2000
- 9 Takie Sugiyama Lebra 『Japanese patterns of behavior』 University of Hawaii Press 1976
- 10 『贈与交換の人類学』 伊藤幹治 筑摩書房 1995
- 11 『定訳 菊と刀』 長谷川松治訳 文弘社 1967
- 12 『贈り物と交換の文化人類学』 小馬徹 御茶の水書房 2000

選考文献

伊藤幹治『日本人の贈答』ミネルブア書房 1984

マルセル・モース『贈与論』上海人民出版社 2002

伊藤幹治『贈与交換の人類学』筑摩書房 1995

小馬徹『贈り物と交換の文化人類学』御茶の水書房 2000

長谷川松治訳『定訳 菊と刀』文弘社 1967

閻曇翔『贈り物の移動』上海人民出版社 2000